

被災地に派遣された養護教諭の支援活動に関する研究(第4報)

－派遣養護教諭の支援活動に対する「思い」の変容－

Study on the Support Activities of School Nurses Dispatched to Disaster Areas (Part4)

－Changes in the "Thoughts" of Dispatched School Nurses toward Their Support
Activities－

松田 香織・渡辺 美恵*・土田 満**・山田 小夜子***

関市公立学校

* 愛知みずほ短期大学

** 愛知みずほ大学大学院

*** 中部学院大学

Kaori MATSUDA, Mie WATANABE*, Mitsuru TSUCHIDA**

and Sayoko YAMADA***

Seki City Public School

** Aichi Mizuho Junior College*

*** The Graduate Center of Human Sciences, Aichi Mizuho College*

**** Chubu Gakuin University*

Abstract

The results clarified changes in the “thoughts” of dispatched school nurses toward their disaster support activities.

Before the activities, there was a change in their "thoughts" from [feeling confused about the dispatch] to [developing a sense of mission as a dispatched school nurse]. This change was associated with [asking oneself about role-fulfillment] and [effectively preparing for the dispatch] as background factors.

[Having a sense of difficulty in performing support activities] and [bearing mental and physical burdens in the disaster-affected area] intensified their [feeling powerless and conflicted about this], when [becoming aware of the importance of daily communication and support]. They continued their activities while [feeling powerless and conflicted about this], but [being encouraged by the disaster-affected area] and [being thankful to the accepting school], they were [exploring the roles of dispatched school nurses].

Furthermore, [being thanked as a dispatched school nurse] and [achieving favorable outcomes of support activities], they started [realizing the roles of dispatched school nurses] and consequently [being determined to devote oneself to school nurse practice in the future]. The desire to use many experiences, such as [realizing the roles of dispatched school nurses], [achieving favorable outcomes of support activities], [being thankful to the disaster-affected area], and [regretting insufficient support activities], for future practice further promoted their [being determined to devote oneself to school nurse practice in the future].

キーワード: 災害支援活動; 派遣養護教諭; 思い; 変容

Key Word : disaster support activities; dispatched school nurse to disaster areas; thought; change.

I. はじめに

2016年4月14日21時26分に熊本県を震源とする地震が発生し、熊本県を中心とする一連の地域は、2日間のうちに最大震度7の揺れに2度も見舞われた¹⁾。この熊本地震に対し、児童生徒の心のケア等の支援のため養護教諭等が被災地に派遣され、支援活動を行った。この派遣要請では、養護教諭または心のケアができる教諭の派遣が依頼されており²⁾、災害時の子ども心のケアの重要性が伺える。鹿間ら³⁾は、災害時、養護教諭は、心身の健康状態を的確に把握するとともに、専門的知識と経験を生かし、些細な変化にも敏感に気付くことが大切であると述べている。これは、災害時における健康観察や健康相談といった心のケアの重要性を示している。2011年3月11日に発生した東日本大震災では、被災地に養護教諭が派遣され、被災児童生徒の心のケアや健康指導を行った⁴⁾。東日本大震災時、被災地の学校に派遣され、児童生徒サポートチームの一員として活動した養護教諭は、被災校の養護教諭が、先の見えない中で現実の心配から疲労感が募っていることや、そのような中で傍にいて気持ちを汲み取っていける同職の支援者の意義が大きいことを報告している⁵⁾。日常的に子どもと関わることができ、さらに、被災地の養護教諭を支えることができる養護教諭を被災地の学校へ派遣することは、適切、かつ効果的であると考えられる。東日本大震災の状況下で、より明確にされた養護活動の必要性⁶⁾が、熊本地震の際に養護教諭の派遣が求められた大きな理由である。しかし、実際に熊本地震後に派遣された養護教諭は、見知らぬ土地で、限られた期間内に求められる役割が担えるのかという不安は大きかったと述べている⁷⁾。さらに、派遣された養護教諭は、支援活動中に、「不慣れた生活による心身への負担感」から精神的な負担や疲労感を感じていたことが報告されており⁸⁾、支援活動中の負担軽減を課題としてあげている。

渡辺ら⁸⁾は、被災地に派遣された養護教諭が支援活動に対して抱いた「思い」の研究で、支援活動前と支援活動後では、「思い」に変化が生じていたことを報告した。それらは、「不安」や「戸惑い」から「達成感」や「感謝」に変化しており、派遣養護教諭の心身の負担の軽減につながっていた。しかし、支援活動中は、想定していた支援活動との相違によるもどかしさを感じ、無力な自分との葛藤を生じさせている。この「もどかしさ」や「無力感」、「葛藤」が解消されれば、適切な支援につながるが、解消されずに活動を続けた場

合は、派遣養護教諭がストレスを抱えたまま活動を行うことにとどまらず、適切な支援が提供されないことにもつながる可能性も指摘している。そこで、派遣養護教諭が抱いた「思い」の変容の過程を明らかにするとともに、変容に影響を与えた事柄について検討する。本研究の目的は、被災地に派遣された養護教諭が支援活動に対して抱いた「思い」の変容を明らかにし、その変容に与えた事柄について考察することである。

II. 研究方法

1. 調査対象

2016年4月に発生した熊本地震後に、都道府県教育委員会を通じて被災地へ派遣された3県の公立学校に勤務する養護教諭11名を対象とした。

2. 調査期間及びデータ収集方法

2017年8月～10月に、災害派遣時の支援活動に関する無記名自記式の質問紙調査を実施した。質問紙は、縁故法を用いて直接研究対象者へ郵送し、回収は、専用の返信用封筒により直接研究者に郵送してもらった。

質問紙の内容は、年代、派遣日数、派遣先の学校種と、派遣養護教諭が支援活動前、支援活動中、支援活動後に抱いた気持ちや考え、願いなどの「思い」について、自由記述で回答を求めた。その回答の中から、「支援活動前」と「支援活動後」で支援活動に対して不安や戸惑い等の「思い」から感謝や達成感等の「思い」に変化していたことが確認できた養護教諭3名の回答を分析対象とした。

3. 分析方法

自由記述の分析には、大谷が開発したSCAT⁹⁾¹⁰⁾(Steps for Coding and Theorization)を用いて、研究者2名で検討を行い、分析した。SCATは、言語データをセグメント化し、そのそれぞれに<1>テキスト中の注目すべき語句、<2>テキスト中の語句の言い換え、<3>左を説明するようなテキスト外の概念、<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案して付していく4ステップのコーディングと、そのテーマや構成概念を紡いでストーリー・ラインと理論を記述する手続きとからなる分析方法である。比較的小規模の質的データの分析に有効であり¹⁰⁾、本研究のような少ないケースの分析にも有効であることから採用した。

対象者である養護教諭A～Cの自由記述を「支援活動前」、「支援活動中」、「支援活動後」に分けて、4ステップのコーディングを行った。コーディング後、ス

ストーリー・ラインを作成した。その後、テーマ・概念やセグメントを参考に似たテーマ・概念をまとめてカテゴリー化した。さらに、構成概念、カテゴリーを用いて、支援活動前、支援活動中、支援活動後の「思い」の変容を図に示した。カテゴリー間の関係性の検討については、ストーリー・ラインを参考に、カテゴリーの変化や影響の関連、相互関係、相反関係について検討しながら、図式化を進めた。派遣養護教諭1名を含む共同研究者間で協議し合意を得ながら行った。分析手順を以下に示す。

- (1)自由記述の中から、支援活動に関わる記述を抜き出し、セグメント化し、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述する。
- (2)セグメント化したデータを<1>テキストの中の注目すべき語句を書き出す。次に、<2>それを言いかえるためのデータ外の語句を記入する。続いて、<3><2>を説明するための語句を記入する。<4>そこから浮き上がるテーマ・構成概念を記入し、4ステップのコーディングを行う。
- (3)<4>で浮き上がったテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述する。
- (4)セグメントの内容を考慮しながら、テーマ・概念との類似性に基づきカテゴリー化する。
- (5)テーマ・構成概念、カテゴリーを用いて、支援活動前、支援活動中、支援活動後の「思い」の変容を図に示す。

4. 倫理的配慮

調査対象者に本研究の目的と方法、プライバシーの保護、自由意志による参加であることを口頭で説明した。得られた全てのデータは、研究以外の目的で使用しないことを口頭で説明し、本研究者以外が目にする事のない、施錠のできる場所で保管した。なお、本研究は、中部学院大学・中部学院大学短期大学部倫理委員会の承認(E17-0008)を得て行った。

5. 用語の定義

本研究において、次の3つの用語について定義して使用する。

(1)派遣養護教諭

各都道府県教育委員会を通じて被災地に派遣された養護教諭

(2)受入養護教諭

被災した学校に勤務し、派遣養護教諭を受け入れた養護教諭

(3)「思い」

気持ちや考え、願いなど

III. 結果

1. 対象者の属性

調査対象者の基本属性を表1に示した。

表1 対象者の属性

項目	養護教諭 A	養護教諭 B	養護教諭 C
年代	20代	40代	50代
派遣先の学校種	中学校	中学校	小学校
派遣日数	9日	8日	10日

表2 派遣養護教諭A「支援活動前」のSCAT分析フォーム(一部)

No.	テキスト	<1> テキスト中の 注目すべき語句	<2> テキスト中の 語句の言い換え	<3> 左を説明するような テキスト外 の概念	<4> テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)
1	なぜ自分が?と思ったが、少しでも現地のためになるならと思って参加を決めた。	なぜ自分?、少しでも現地のため、参加を決めた	想定外の派遣、戸惑い、役に立ちたい、参加への決意	派遣打診。打診の受容。	想定外の派遣決定への戸惑い。参加への決意の高まり。
2	自分の学校の養護教諭が不在になることになり、申し訳ない気持ちでいっぱいであった。自校の先生方が行くことを応援してください、頑張ろうと思った。	自分の学校の養護教諭、不在になる、申し訳ない、自校の先生方、行くことを応援、頑張ろう	不在となる自校の養護教諭、罪悪感、周囲の応援、精一杯、決意	自校への配慮。	不在となることへの心苦しさ。周囲の応援による意欲の高まり。
3	個人で被災地へ行っているわけではなく、学校や市、県の代表としていくことを考えると本当に自分に務まるのか不安だった。	学校や市、県の代表、自分に務まるのか、不安	任務としての派遣、役割の遂行、不安	自治体からの派遣。	任務としての責任の重さ。責任の重さに対する不安。
4	相手の養護教諭の先生は、どのような先生だろうか。1日の流れや仕事内容が分からず、不安。	相手の養護教諭の先生、は、どのような先生、1日の流れや仕事内容が分からず、不安	受入養護教諭、人柄、支援活動の情報不足、不安	2人配置。	受入養護教諭との協働への不安。情報不足な支援活動に対する不安。
5	被災地の方は食べ物や住む場所にきつと困っているだろうに、自分はホテルで生活してよいのだろうか。自分の食べ物のことや再度地震があると思うと怖い。	被災地の方、食べ物や住む場所、困っている、ホテルで生活してよいのだろうか、自分の食べ物、再度地震、怖い	被災地の衣食住、安定した住居環境、ジレンマ、被災地での食事、地震への恐怖	被災地への生活。	被災地の生活に対する不安。自身の安心できる住居環境へのジレンマ。

3名の養護教諭は、20代、40代、50代であった。派遣日数は8～10日、派遣校種は、小学校1名、中学校2名であった。

2. 派遣養護教諭A～Cのストーリー・ライン

対象者である派遣養護教諭A～Cの自由記述内容を「支援活動前」, 「支援活動中」, 「支援活動後」に分け

て、SCATの手続きを利用して分析した。派遣養護教諭Aの「支援活動前」のSCAT分析フォームの一部を例として表2に示す。また、テーマ・構成概念を全て紡ぎ合わせて作成したA～Cのそれぞれの活動時期のストーリー・ラインを表3に示す。ストーリー・ラインの中の下線部は、テーマ・構成概念を示している。

表3 活動時期別のストーリー・ライン

下線は、テーマ・構成概念

時期	養護教諭 A	養護教諭 B	養護教諭 C
支援活動前	派遣養護教諭 A は、支援活動前、 <u>想定外の派遣決定への戸惑い、自校に養護教諭が不在となることへの心苦しさを抱いていた。受入養護教諭との協働への不安や情報不足な支援活動に対する不安</u> といった職務面での思いを抱き、 <u>任務としての責任の重さや責任の重さに対する不安</u> を感じていた。しかし、 <u>周囲の応援による意欲の高まりを感じ、参加への決意を高めていた。</u> さらに、 <u>被災地の生活に対する不安や自身の安心できる住居環境へのジレンマ</u> といった生活面での思いも抱いていた。	派遣養護教諭 B は、被災地での <u>関わり方への不安や不明な支援ニーズから試される自分自身に対する不安</u> を感じていた。 <u>支援活動に対する自身の葛藤を通して派遣養護教諭として役割を自問自答し、果たす役割の重さを実感</u> していた。しかし、いくら想像しても <u>予測の域を出ない想像に</u> かならず、 <u>同じ立場になり得ない気づき</u> を得ていた。	派遣養護教諭 C は、支援活動前、 <u>被災地の被害状況からくる不安</u> を抱いていたが、 <u>貢献したい意欲も持ち合わせていた。</u> また、 <u>不明確な支援活動内容であったが、派遣前の引き継ぎの有効性</u> を感じていた。
支援活動中	養護教諭 A は、支援活動中、 <u>被災地の言葉遣いへの迷いから心のケアの困難感</u> を感じていた。 <u>日常的な関わりの重要性や日常的な関わりの有効性</u> に気付き、 <u>受入養護教諭の対応時間の確保を役割と捉え、保健室不在時の来室者対応</u> を行っていた。 <u>受入養護教諭との協働への配慮を大切にし、疲労困憊な教職員の負担軽減を願いながらも、役割が果たせない無力感</u> を感じ、 <u>役立ちたい自分との葛藤</u> を抱いていた。	派遣養護教諭 B は、支援活動中、被災地の <u>児童生徒の把握困難な心身の状態から心のケアの困難感</u> を抱いたが、 <u>増加する来室者対応の気づきや細やかな対応の必要性</u> から、派遣養護教諭ではなく、 <u>受入養護教諭が実施する心のケアの必要性</u> を感じていた。また、自身の活動に対する <u>熱意と能力の相違</u> を感じ、 <u>任務に対する無力感</u> を抱いていた。さらに、 <u>受入養護教諭の受入れによる負担感への懸念</u> から、 <u>有効な支援確立の困難さ</u> を感じていた。しかし、 <u>対応時間の確保に努め、事務作業の有効性</u> を実感していた。 <u>垣間見える被災地の生活への心苦しき感じながらも、受入校職員から提供される有効な情報への感謝</u> を抱いていた。	派遣養護教諭 C は、支援活動後、 <u>被災者の懸命に進む前向きさに触れ、被災地の前向きさから感じる励まし</u> を得て、活動を進めていた。こういった励まし等から <u>受入校職員の気遣いへの感謝の気持ち</u> をもった。
支援活動後	派遣養護教諭 A は、支援活動後、 <u>受入養護教諭のサポートが役目と</u> 考え、 <u>協働のバランスの重要性</u> を認識し、活動を進めていた。 <u>心のケアの困難感</u> から、 <u>支援ニーズの相違</u> を感じ、 <u>活動への後悔</u> を抱いていた。 <u>受入養護教諭からの感謝や被災者からの励ましへの感謝</u> を抱き、 <u>尊敬する養護教諭像や自身の活動成果への気づき</u> を得ていた。	派遣養護教諭 B は、支援活動後、 <u>自身が受援を想定した準備の必要性</u> を感じた。さらに、 <u>経験を活かす決意</u> から <u>今後の活動展開への期待</u> をもった。	派遣養護教諭 C は、支援活動後、 <u>日常的な関わりの重要性</u> を再認識し、 <u>経験から得た学びを今後の決意</u> に繋げていた。

表 4 派遣養護教諭の「思い」のテーマ・構成概念のカテゴリー化

時期	テーマ・構成概念	カテゴリー	
支援活動前	不明な支援ニーズ 不明確な支援活動内容 情報不足な支援活動に対する不安 受入養護教諭との協働への不安	支援活動に対する不安感	
	任務としての責任の重さ 責任の重さに対する不安 果たす役割の重さ	責任の重さに対する不安感	
	派遣養護教諭としての役割を自問自答 支援活動に対する自身の葛藤 試される自分自身に対する不安	役割達成への自問自答	
	被災地の生活に対する不安 自身の安心できる住居環境へのジレンマ 被災地の被害状況からくる不安	被災地での生活に対する不安感	
	予測の域を出ない想像 被災地での関わり方への不安 同じ立場になり得ない気づき	被災者との関わり方に対する不安感	
	周囲の応援による意欲の高まり 参加への決意 貢献したい意欲	派遣養護教諭としての使命感	
	想定外の派遣決定への戸惑い 不在となることへの心苦しき	派遣に対する戸惑い	
	派遣前の引き継ぎの有効性	派遣前の有効な準備	
	支援活動中	受入養護教諭の負担軽減 受入養護教諭の対応時間の確保 保健室不在時の来室者対応 対応時間の確保 事務作業の有効性 細やかな対応の必要性 疲労困憊な教職員の負担軽減 増加する来室者対応の気づき 受入養護教諭との協働への配慮 受入による負担感への懸念	派遣養護教諭の役割を模索
		心のケアの困難感 把握困難な心身の状態 有効な支援確立の困難さ 被災地での言葉遣いへの迷い	活動上の困難感
		役立ちたい自分との葛藤 役割が果たせない無力感 任務に対する無力感 熱意と能力の相違	無力な自分との葛藤
		受入養護教諭が実施する心のケアの必要性 日常的な関わりの重要性 日常的な関わりの有効性	日常的な関わりの重要性
		受入校職員の気遣いへの感謝 受入校職員から提供される有効な情報への感謝	受け入れ校への感謝
		懸命に進む前向きさ 被災地の前向きさから感じる励まし	被災地から感じる励まし
垣間見える被災地の生活への心苦しき		被災地の生活に触れる心身への負担感	
支援活動後		協働のバランスの重要性 日常的な関わりの重要性を再認識 受入養護教諭のサポートが役目	派遣養護教諭の役割の自覚
		自身の活動成果への気づき 理想とする養護教諭像	支援活動の成果
		受援を想定した準備の必要性 心のケアの心残り 活動への後悔 支援ニーズの相違	支援活動への心残り
		被災者からの励ましへの感謝 経験から得た学び	被災地への感謝
		経験を活かす決意 今後の決意 今後の活動展開への期待	今後の養護実践への決意
		受入養護教諭からの感謝	派遣養護教諭が受けた感謝

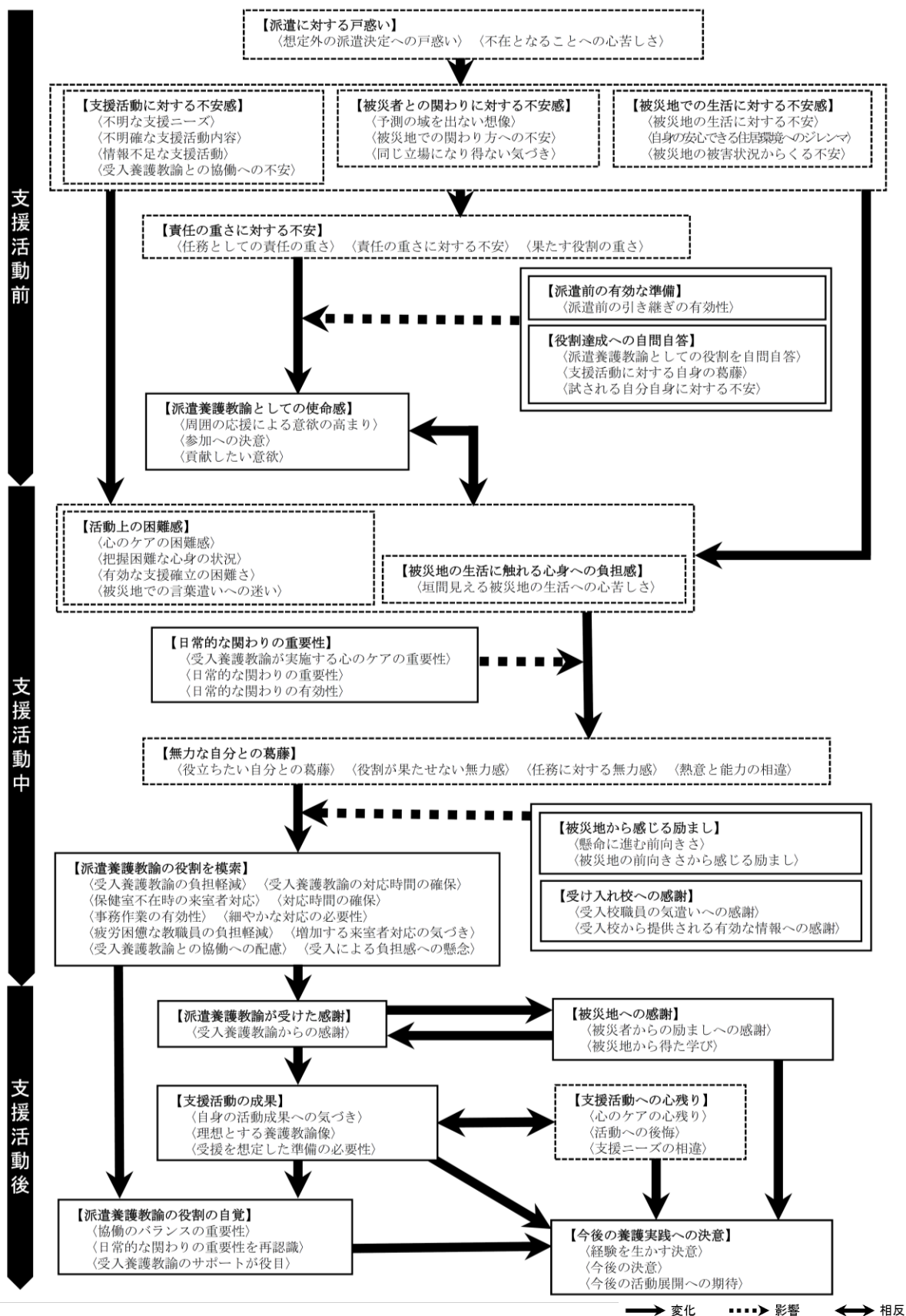


図1 派遣養護教諭が抱いた支援活動に対する「思い」の変容

3. 構成概念の抽出

抽出されたテーマ・構成概念を類似性に基づき抽象化し、64のテーマ・構成概念から、21のカテゴリーが抽出された。抽出されたカテゴリーを表4に示し、カテゴリーは【 】を用いて説明する。

「支援活動前」は、22の構成概念から、【支援活動に対する不安感】、【責任の重さに対する不安感】、【役割達成への自問自答】、【被災地での生活に対する不安感】、【被災者との関わり方に対する不安感】、【派遣養護教諭としての使命感】、【派遣に対する戸惑い】、【派遣前の有効な準備】の8カテゴリーが抽出された。

「支援活動中」は、27の構成概念から、【派遣養護教諭の役割を模索】、【活動上の困難感】、【無力な自分との葛藤】、【日常的な関わり的重要性】、【受け入れ校への感謝】、【被災地から感じる励まし】、【被災地の生活に触れる心身への負担感】の7カテゴリーが抽出された。

「支援活動後」は、15の構成概念から、【派遣養護教諭の役割の自覚】、【支援活動の成果】、【支援活動の心残り】、【被災地への感謝】、【今後の養護実践への決意】、【派遣養護教諭が受けた感謝】の6カテゴリーが抽出された。

4. 派遣養護教諭の「思い」の変容

派遣養護教諭A～Cのストーリー・ラインを参考に、抽出されたカテゴリーを用いて、「思い」の変容を図式化した(図1)。

支援活動前は、【派遣に対する戸惑い】を抱き、【支援活動に対する不安感】、【被災地での生活に対する不安感】、【被災者との関わり方に対する不安感】といった不安な思いへとつながっていた。これらの不安な思いが【責任の重さに対する不安感】へとつながり、【役割達成への自問自答】や【派遣前の有効な準備】の影響によって、【派遣養護教諭としての使命感】に変容していた。

支援活動中は、使命感をもつ一方で、【活動上の困難感】、【被災地の生活に触れる心身への負担感】を感じていた。【日常的な関わり的重要性】への気付きが影響を与え、【無力な自分との葛藤】につながっていた。さらに、【被災地から感じる励まし】や【受け入れ校への感謝】が影響を与え、【派遣養護教諭の役割を模索】することに变容していた。

支援活動後は、支援活動中の【派遣養護教諭の役割を模索】が、【派遣養護教諭の役割の自覚】につながっていた。さらに、【派遣養護教諭が受けた感謝】から【支援活動の成果】を感じ、ここでも【派遣養護教諭の役割の自覚】を感じる背景となっていた。【派遣養護教諭が受けた感謝】は自身の【被災地への感謝】と相互につながり、この思いが【今後の養護実践への決意】を

抱かせていた。【支援活動の成果】がある一方で、【支援活動の心残り】も感じているが、この心残りが【今後の養護実践への決意】を高めていた。

IV. 考察

1. 派遣養護教諭が支援活動に対して抱いた「思い」の変容

(1) 支援活動前の「思い」の変容への影響

支援活動前に、【派遣に対する戸惑い】を抱いていたのは、支援活動参加の打診や依頼があったときであると考えられる。被災地に派遣された看護師は、派遣時、「急な派遣要請に対する不安」や「支援活動への不安感」を抱いていた実態が報告されている¹⁴⁾。本調査でも、派遣される養護教諭は、同様の思いを抱いていたことが確認できた。また、これらの戸惑いを抱きながら参加を検討する中で、【支援活動に対する不安感】や【被災地での生活に対する不安感】、【被災者との関わり方に対する不安感】の不安が募っていったことが推察できる。しかし、この戸惑いや不安感が【責任の重さに対する不安】をもたらし、【派遣養護教諭としての使命感】に変容していた。この変容については、【派遣前の有効な準備】や【役割達成への自問自答】が影響したものと考えられた。派遣養護教諭Aは、〈支援活動に対する自身の葛藤〉を抱き、〈派遣養護教諭としての役割を自問自答〉する中で、〈果たす役割の重さ〉を感じていた。派遣養護教諭Cは、〈不明確な支援活動〉であったが、〈派遣前の引き継ぎの有効性〉を感じていた。これらにより、被災地の子どもたちや教職員のために派遣養護教諭として、自分は何ができるのかを考え、自問自答したり準備したりしたことが、使命感を高めたと推察された。酒井ら¹²⁾は、東日本大震災で支援にあたった保健師の心理状況を報告した研究の中で、使命感や責任感は自らを鼓舞する役割があることを明らかにしている。養護教諭としての役割や使命感を自分なりに見出し、事前準備の充実を図ることは、活動に向かう上で重要となる。

(2) 支援活動中の「思い」の変容への影響

支援活動中には、【活動上の困難感】や【被災地に触れる心身の負担感】が支援活動前の【派遣養護教諭としての使命感】との相反により【無力な自分との葛藤】を強めていたと考えられる。派遣養護教諭Bは、〈心のケアの困難感〉を抱いたが、〈増加する来室者対応の気づき〉や〈細やかな対応の必要性〉といった【日常的な関わり的重要性】を感じたことで、派遣養護教諭ではなく、受入養護教諭が実施する〈心のケアの必要性〉を感じていた。そのため、【日常的な関わり的重要性】への気付きは、【無力な自分との葛藤】をさらに強めることに影響していたと推察される。【無力な自分と

の葛藤)を抱きながらの活動ではあったが、【派遣養護教諭の役割を模索】しており、そこには、【被災地から感じる励まし】や【受け入れ校への感謝】が影響していたものと推察される。派遣養護教諭 C は、〈被災者の懸命に進む前向きさ〉や〈被災地の前向きさから感じる励まし〉を得て、活動を進めている。酒井ら¹²⁾は、東日本大震災被災地で支援活動を行った保健師は、初期の混乱期が一段落し、「安心感」を得た後に生じる否定的な感情として不満や葛藤を抱いていたが、周囲のサポートによって解決しており、この解決の過程で、周囲との考え方の違いを受け入れ、新たな視点や学びにつなげたことは、「新たな可能性」や“人間としての強さ”に重なるものであると述べている。

本調査でも、懸命に活動する被災地の養護教諭と教職員姿からの励ましや周囲のサポートが自分の役割や在り方を模索し、活動の意義を見出そうとするきっかけとなっていた。励ましや感謝といった周囲のサポートは、自身の役割を模索する上で重要となることが示唆された。

(3) 支援活動後の「思い」の変容への影響

支援活動後は、【派遣養護教諭が受けた感謝】から【支援活動の成果】を感じていた。さらに、支援活動中に役割を自分なりに模索したことにより、【派遣養護教諭の役割の自覚】を得ていた。派遣養護教諭 A は、〈受入養護教諭からの感謝〉や〈被災者からの励ましへの感謝〉から〈自身の活動成果への気づき〉を得ていた。また、派遣養護教諭 B は、〈経験を活かす決意〉から〈今後の活動展開への期待〉を抱いていた。〈受入養護教諭のサポートが役目〉と考える派遣養護教諭 A のように、支援活動を通して持ち続けていた、被災地の子どもたちや教職員のために派遣養護教諭として何ができるのかを考える姿勢は、日頃から向き合っている子どもたちとの関わりと同様である。東日本大震災時に被災地に派遣された養護教諭は、心のケアを支援するために被災地へ向かったが、実際は、直接的な心のケアではなく、学校の環境整備を中心に行っていた¹⁷⁾。そのような状況下でこの養護教諭は、「心身を通して児童生徒の心に触れる」ことはなかったが、被災地の職員から環境整備に対する感謝の気持ちを伝えられ、広い意味で心のケア活動に携われたと報告している¹⁸⁾。派遣養護教諭の在り方や派遣された意義を自分なりに模索し、見出したことは、今後に生かそうとする思いを後押しし、【今後の養護実践への決意】を高めていたと推察される。これに影響する要素として、【派遣養護教諭の役割の自覚】、【支援活動の成果】、【被災地への感謝】、【支援活動への心残り】が抽出され、多くの経験を今後に生かそうとする姿勢が明らかになった。想定を超える事態が起り得る災害派遣において、被災

地のことを第一に考えながら、目の前で起こる事柄に真摯に向き合い、臨機応変に向き合った過程を、自分なりに価値づける姿勢が重要であることが示唆される。

2. 本研究の限界

本調査は、「支援活動前」と「支援活動後」で支援活動に対して不安や戸惑い等の「思い」から感謝や達成感等の「思い」に変化していたことが確認できた養護教諭を対象に実施した。そのため、支援活動中に抱いたストレスや心身の負担感を軽減させることができた養護教諭の「思い」が反映されており、ストレスを抱えたまま支援活動を終えた養護教諭の「思い」の変容は明らかになっていない。また、対象人数は3人であり、少数のデータ、なおかつ、自由記述のデータであるため、派遣養護教諭の思いを一般化しているとは言い難い。今後、さらにデータを積み重ね、検討を行う必要がある。

V. まとめ

2017年8月～10月に、派遣養護教諭を対象に、支援活動に対して質問紙調査を行い、支援活動に対する「思い」について自由記述で回答を求めた。「支援活動前」と「支援活動後」で変化が確認できた3名の記述内容から、派遣養護教諭の支援活動に対する「思い」の変容が明らかになった。

1. 支援活動前に、【派遣に対する戸惑い】が【派遣養護教諭としての使命感】に変容していたが、背景に【役割達成への自問自答】や【派遣前の有効な準備】が影響していた。
2. 【活動上の困難感】や【被災地に触れる心身の負担感】が【日常的な関わりの重要性】への気づきにより、【無力な自分との葛藤】をさらに強めることに影響していた。【無力な自分との葛藤】を抱きながらの活動であったが、【被災地から感じる励まし】や【受け入れ校への感謝】が影響し、【派遣養護教諭の役割を模索】していた。
3. 【派遣養護教諭が受けた感謝】や【支援活動の成果】から【派遣養護教諭の役割の自覚】を得て、【今後の養護実践への決意】を高めていた。【派遣養護教諭の役割の自覚】、【支援活動の成果】、【被災地への感謝】、【支援活動への心残り】といった多くの経験を今後に生かそうとする思いを後押しし、【今後の養護実践への決意】をさらに高めていた。

引用・参考文献

- 1) 国土交通省気象庁 HP, 平成28年熊本地震の関連情報,
https://www.jma.go.jp/jma/menu/h28_kumamoto_jishin_menu.html (2021.1.11 確認)

- 2) 全国知事会：平成 28 年熊本地震に係る養護教諭等の派遣要請について（依頼）（知調二発第 31 号），平成 28 年 5 月 10 日
- 3) 鹿間久美子，鈴木依子，中村理香子：自然災害時における養護教諭の役割—子どもへの対応に着目して—，京都女子大学生生活福祉学科紀要，14，41-49，2019
- 4) 小田隆史：東日本大震災復興における教育分野の現状と課題についての研究 研究中間報告書，（公財）ひょうご震災記念 21 世紀研究機構研究戦略センター，第 2 章 災害サイクルにみる教職員の役割—応急対応・広域連携・震災伝承，22，2018
- 5) 石村嘉奈子：児童生徒サポートチームの養護教諭として支援したこと，学校健康相談研究，9(1)，61-65，2011
- 6) 三村由香里：東日本大震災における養護教諭の役割—震災の状況下でより明らかになった養護実践の必要性—，日本健康相談活動学会誌，7(1)，21-24，2012
- 7) 西連寺江里子：ボランティアの視点から見た災害発生時の学校救急看護と養護教諭の役割，学校救急看護研究，10(1)，20-25，2017
- 8) 渡辺美恵・松田香織・山田小夜子他：被災地に派遣された養護教諭の支援活動に関する研究(第 2 報)—派遣養護教諭が抱いた「思い」の分析から—，学校健康相談研究，18(1)，79-88，2021
- 9) 大谷尚：4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，54(2)，27-44，2008
- 10) 大谷尚：明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法，日本感性工学会論文誌，10(3)，155-160，2011
- 11) 松清由美子・上平悦子：東日本大震災で支援活動を展開した看護師の心理状況とその背景，日本災害看護学会誌，15(2)，15-24，2013
- 12) 酒井美緒，山科満：東日本大震災被災地における保健室の心理的過程，保健師ジャーナル，73(2)，156-161，2017
- 13) 小田隆史：東日本大震災復興における教育分野の現状と課題についての研究 研究中間報告書，（公財）ひょうご震災記念 21 世紀研究機構研究戦略センター，第 2 章 災害サイクルにみる教職員の役割—応急対応・広域連携・震災伝承，61-65，2018